

カラオケ喫茶のママで生きる

—私の幸せは此処に—

大 崎 洋

1 はじめに

カラオケ喫茶は歌が歌える喫茶店のことであり、演歌・歌謡曲を中心に歌われている。洋曲を歌おうものなら、お客のみならず経営者からも「出て行ってくれ」とう過激なお店もある。

そこでは、ママを中心としたお店の運営がなされ、普通の喫茶店やスナックとは違い、ママとお客さんとの関係が家族・家庭のように濃密である。

コロナ禍により、カラオケ店(カラオケボックス・カラオケ喫茶・カラオケスナック)は休業に追い込まれた店もある。

2021年10月17日現在、経営を続けるカラオケ喫茶は行政の指導により、カラオケは歌えず、ソフトドリンクの提供のみであり、喫茶店と同じ営業スタイルをとっている。大多数のカラオケ喫茶は店内や公共施設の会場で歌謡祭を中心としたイベントを行っていたが、非常事態宣言～蔓延防止期間はほとんどのお店がイベントを自粛している。

5ヶ月間はカラオケが歌えない状況が続いたが、リースのカラオケ機材や配付料金等の支払が、毎月約8万円という額の負担が経営に重くのしかかっている。

カラオケは歌えないが、お店のママは元気である。コロナ禍の中でも、カラオケ喫茶ファンがお店に通うのは、「歌は歌えないが、何

よりもママに魅力があり、ママに会えるから」と、語る。

本稿では名古屋市と豊田市の代表的なカラオケ喫茶のママ5人(平均年齢は69.4歳)にインタビューし、その内容について考察した。

2 調査方法と調査項目

2.1 調査方法

ママには事前に電話をし、インタビューのお願いとインタビュー内容について説明をし、個人情報に触れることもお聞きしたいと了解をとった。

対面でのインタビューは約2時間行い、不明事項等は、後程数回電話で確認した。

2.2 調査項目(インタビュー内容)

①ママの来歴等

年齢、出身地、居住歴、過去の職業、ママ歴、カラオケ大会での成績、自分の性格、ママでよかったか、ママの趣味、カラオケ喫茶を始めた動機。

②お店の概要

立地(その土地・場所を選んだ理由)、営業歴・営業年数、お店の大きさ(収容人員)、お客の年齢層、お店の特徴・自慢できるところ(ウリ)、お店でよく歌われる曲、お店主催のイベント(公共施設での歌謡祭)等。

③ママとして

お店を始めてよかったこと、楽しいこと・苦勞していること・一番失敗したこと・一番困ること・一番充実を感じる時(こと)・お客さんに接するときの心がまえ(男性客に対して、女性客に対して)、お客さんへの対応で一番苦慮していること、お客さんは、ママをどういう眼でみているか(母親か・友達か・恋人か)、イヤな客は、公共施設でのイベントを開催するときの着意事項、ママから見て、お客さんがお店に通う理由、歌謡曲・演歌について(好きか・将来は)、仕事以外での活動(地域活動等、福祉活動)、女性の商業観、ジェンダー・LGBTについて、SNSは使うか、カラオケ喫茶の将来は、今は幸せか、悔いの残ること(こんな事をしておけばよかった)等。

3 調査結果

各お店でのインタビュー結果

3.1 「五季」ママ

名古屋市北区三軒町、23年営業(40人収容)、経営者(夫の奥原森郎さん)が、五木ひろしの大ファンで店名「五季」は五木から。

ママは奥原ハルさん(75歳「図1「五季」ママ」)京都府宮津市出身、前職は会社員・介護スタッフなど。

本年6月、森郎さんが80歳になったのを機に、多くのお客さんから惜しまれて閉店。森郎さんが、歌が大好きで、公務員を定年退職後、多くの人が集える場所をとカラオケ喫茶を開業。

ママは、小学校2年生の時、父親を亡くし苦勞されており、何よりも人に対する感謝・思いやりが横溢していた。お店を続けて欲しいというお客さんの要望が強く、もう少し、お店を続けたかったとの事。そのことに話が及ぶと涙ぐんでおられたのが印象的。

「地域の人たちとのつながり、助けあって

いくのが商売なんだなと思ってます。自分も、地域を大事にしながら人の役にたつことのできる“商売”を続けたかった。」

そして、「友達や地域の人がいつでも立ち寄って欲しい」と。決して自分をアピールせず、どこまでもお客さんファーストの笑顔の素敵なママであった。

「魅力的な女性」とは、人の“魅力”を発見できる人のことであるが、まさに「五季」のママは優しさに溢れ、魅力的な人であった。リースのカラオケ機材は業者に返却したが、音響設備はいつでも使えるように、そのままにしてある。

3.2 「うさぎのいえ」ママ

名古屋市緑区太子、9年営業(30人収容)、ママは、岡田尚子さん(68歳「図2「うさぎのいえ」ママ」)、既婚、5年前にデビューしたプロの演歌歌手。介護ボランティア「うさぎの会」(介護施設で歌・演芸などを提供するグループ)を16年主宰。大分県出身、前職は会社員、プロ歌手になりたくて高卒後18歳で名古屋へ。いろんな人と知り合え、介護ボランティアを始めたことから9年前カラオケ喫茶を始める。

過去にママがうさぎを飼っており、うさぎは皆に可愛がられるので、店名「うさぎ」はそれにちなみ店名にしたとの事。

カラオケ大会では数々の受賞歴あり。「人」が大好きという、お世話好きでアネゴ肌のママ。困っている人がいたら黙ってられない「九州出身の、情熱的で男を立てる女」(本人談)と言う。

筆者は本年6月に「うさぎのいえ」主催の歌謡祭に行ったが、的確なママの指示に対して、ママを女神のように崇めた、運営スタッフの素早い動きが印象的。

「いつもママのそばでお手伝いしたい。」と語る女性スタッフがいたが、そう思わせるには、きっと気持ちに「余裕」のある女性に違

いない。

3.3 「なお」ママ

名古屋市南区三条、14年営業（30人収容）、店名「なお」は友達のなおみさんから。

ママは筒井澄子さん（71歳「図3「なお」ママ」）、三重県紀北町出身、夫と2度の死別。人に使われるのがイヤで22歳でスナックのママになり、ずっとママ一筋。

スナック経営後、喫茶店を始めたが、歌を歌いたいというお客さんのリクエストがあり、お客さんと一緒に楽しもうとカラオケ喫茶を始める。

竹を割ったような性格とは彼女の事か、実に気っぶがいいママである。裏・表のない人柄が多くの人を惹きつける。話していて、こちらも元気ももらう。

「省かない、惜しまない」、「商売は困った人を助けるためにある」と語るママ。

イベント参加者の弁当をスタッフ任せにせず、夜なべして一人で作り上げるママ。

22歳でスナックの経営を始め、二度の夫との死別という筆舌に尽くせぬ人生を歩まれているが、実に明るく、前向きに人生を楽しんでいるという印象を受ける。

話していて、心地よく、「ずっとこのお店で話を聞きたい」と思わせる、凄いママである。

3.4 「あかり」ママ

名古屋市中川区高畑、34年営業（25人収容）、店名の「あかり」は何となく命名。

ママは清水久子さん（74歳「図4「あかり」ママ」）、愛西市出身、演歌歌手清水たまき⁽¹⁾の実母。前職は会社員、30年前スナックのママとなる。

スナック「あかり」を3年経営後、お客さんと一緒に歌を楽しめるようにとカラオケ喫茶「あかり」とする。「お店が私のすべて、お店が生き甲斐」というママ。

懐かしい、昭和テイストのレトロ感覚溢れる「あかり」に来て、演歌・歌謡曲に触れて欲しいというママ。障がい者共同作業所の立ち上げに携わる等、ボランティアにも意欲的。

開店10周年を記念し、作成した「カラオケ喫茶あかり10周年記念文集」にはカラオケのお店も沢山でき、お店がお客様を呼ぶ時代から、お客様がお店を選ぶご時世になり、どの店も営業しにくくなっているようです。「唄は世につれ、世は唄につれ」という言葉があるように、時代が変わっても、人は唄の中に自分の人生の1コマ1コマの思い出を残しているものと思います。人の心の中から唄は消えることはなく、人の心のよりどころとして、また、ストレス解消の一つとして唄い続けられていくことでしょう。

カラオケを通して大いに声を出し、また体を動かし、恋もして、いつまでも若々しく元気で楽しい人生にしたいものです。

と、ある。

日本人が大切にしているものに「間」という文化がある。ママの接客には、つかず離れずの、絶妙としか表現できない「間合い」がある。つけどんのようにいて、客の心を離れさせない手を心得ているように思える。

お店での中高年の出逢い、恋愛が多く、10組近く再婚したとは驚きだ。ママは、実に渋く、若い時は色々あったんだろうなと思わせる女性であった。

3.5 「わらら」ママ

豊田市青木町、9年営業（30人収容）「わらら」は笑って楽しむから店名に。

キャッチフレーズは“心のバリアを取り払い、誰もが楽しめる店を目指して”。

「高齢者の方にも、障がい者の方も楽しんでもらえるお店」との事。

ママは、佐伯礼子さん（59歳「図5「わらら」ママ」）、岐阜県羽島市出身、24歳で夫と死別後、会社員を経て40歳から介護の世界へ。

介護士～介護福祉士～ケアマネージャーを経て介護施設を経営。

障がい者とカラオケ喫茶に行ったことから、こんな楽しい所があるのかと、興味をもちカラオケ業界に転進。波乱万丈の人生を送られたが、すごい努力家である。底抜けの明るさ、金髪の強烈なママ。タレントの高田純次や上沼恵美子のように軽いノリで生きていきたいと笑って語る。

ママの名刺の裏には

「名古屋出身盲目の演歌歌手「木幡直樹」応援店、大衆演劇「劇団戸田」後援会会長、介護、心の悩み相談窓口、大河内智子のカラオケ教室、忘年会、クリスマス会、新年会、300人の輪、歌謡祭、誕生日会、チョコレートのつかみ取り、くじ引き、トイレットペーパーつかみ取りなどなど、イベントいっぱいのお店」とある。

ママの独白は続く。

「イベントを開催する時は、一生懸命やること、疲れた顔を見せない、自分もお客さんも楽しむ、トイレに行けない程の楽しいプログラムを提供するのが、私の役目。

障がい者の方が一人遊びに行ける場所は本当に少ない、だったら私がその場所を作ろうと、カラオケ喫茶があれば、皆さん歌って、楽しめるし、生き甲斐になるんじゃないかな。お客様同士の距離が近いので、すぐに皆さん仲良くなられる。例えば、なかなかお店には入って来られないお客様がいたら、私が気付かなくてもお客様が声をかけにその人のそばに行ってくれんですよ。高齢者の方や障がい者の方の力になれて、他のお店にないことをするという、思い描いた理想に近いお店に育っている気がしますねえ。これからも皆さんが楽しく過ごせる場として続けていきたいと思う。」

筆者の訪問日には、ママに会うために、コーヒを飲みに来たお客さん5人いたが、ママのことを全員が「情が深い人、何でも相談で

きる人」と語っていた。

まさに、「気配り、もてなし、心意気」を兼ね備えた、「わらわ教の女性教祖様」のようであった。

4 カラオケ喫茶ママの考察

インタビューから、4.1 寅さんのマドンナ「リリー」、4.2 寄り添う人、4.3 母親と母性、4.4 菩薩のようなママ、4.5 幸福なママ、について考察する。

4.1 寅さんのマドンナ「リリー」

多くのカラオケ喫茶ママの雰囲気は、映画『男はつらいよ』の浅丘ルリ子(1940-)演ずるマドンナ「リリー」に似ている。特に今回インタビューした「あかり」ママの雰囲気はそっくりと言ってもいいくらいである。

『お帰り寅さん(最終作の第50作、1997年)』に出てくる「ジャズ喫茶リリー」のママは、寅さんが旅先で知り合ったドサ周りの元歌手だが、現在はジャズ喫茶を経営しているという設定であり、寅さんが最も愛した女性である。浅丘ルリ子は『男はつらいよ』シリーズでマドンナ役を務めた回数は5回である。

第11作(1973年)『寅次郎忘れな草』(ドサ周りの歌手、リリー初登場)

第15作(1975年)『寅次郎相合い傘』(リリーは離婚して売れない歌手に戻り、再び旅暮らし、浅丘はこの年のキネマ旬報女優賞受賞)

第25作(1980年)『寅次郎ハイビスカスの花』(寅さんが苦手な飛行機に乗って沖縄へ病気のリリーを見舞う)

第48作(1995年)『寅次郎紅の花』(リリーが奄美大島の加計呂麻島に小さな家を購入)

第49作(1997年)『寅次郎ハイビスカスの花特別編』(渥美清が他界(1996年8月4日)して1年後、追悼の意を込めて公開)

中でも、第15作の『寅次郎相合傘』は多

くの人からベストテン第1位にランクされており、山田洋次監督自身は第25作が「寅さん作品の仲でベスト3にはいるのでは」と語る。リリーの出演したシリーズは名作揃いと言われ、評価が高い。

第15作『寅次郎相合傘』に出てくる、寅さんとリリーの旅の最中の会話。

リリー「幸せにしてやる？大きなお世話だ。女が幸せになるには男の力を借りなきゃいけないとでも思ってるのかい。笑わせないでよ。」

寅「でも、女の幸せは男次第じゃねえのか。」
リリー「へーえ、初耳だねえ、私今まで一度だってそんなふうにしたことはないね。もしあんたの方がそう思ってたとしたら、それは男の思い上がりってmondだよ。」

寅「お前も可愛げがない女だな。」

リリー「女がどうして可愛くなくっちゃいけないんだい。寅さん、あんたそんなふうだから年がら年中女に振られてばかりいるんだよ。」⁽²⁾

こういう会話がカラオケ喫茶のママと男性客の間で聞こえてくる。

映画の設定では、寅さんが、外で父親と芸者との間にできた子であり、早くに父親のもとを実母が出奔したため、実母への憧憬が強かった。だから、リリーと家庭を持ちたかったし、リリーに母親像を描いていたのではないだろうか。

4.2 寄り添う人

カラオケ喫茶のママは「寄り添う人」でもある。

類似した職業として「相撲部屋の女将さん」がある。

筆者は15年前から大相撲中村部屋（親方は元関脇富士桜、中村榮男（1948-）⁽³⁾、の後援会員として、部屋を応援し部屋が閉鎖さ

れた現在でも親方夫妻と親交があるが、女将の中澤嗣子さん（1951-）⁽⁴⁾は、親方や所属力士はもちろんのこと、応援する人すべてに寄り添う人である。

これは、カラオケ喫茶ママに必要な資質にもあてはまる。

中澤嗣子さんは、女将業について

私としては、後援者にはとても恵まれたとっております。後援者は、親方の部屋運営や弟子の教育方針に賛同してくださる方の集まりで、物心両面にわたり支えてくださる方々です。良い方々が集まっていれば、部屋や部屋の人脈を自分の仕事に利用しようというような人は、自然に弾きだされていきます。それにより、親方と後援者が一丸となって力士の成長を見守ることができるようになり、それが部屋の雰囲気を作っていたと思います。

また、特に東京の後援者は、年3場所の千秋楽やその他の部屋主催のパーティなど、結果的に年に5～6回はお会いすることになり、親戚以上に親しい間柄となっていました。考えてみると、私というよりも親方が、お世話になったり、頂き物をしたりすればすぐにお電話し、失礼がないように心がけていたので、私はその延長線上で、同じようにできるだけ後援者を大切に思って、日ごろの感謝の気持ちを忘れず、お一人お一人と接していました。礼状を書いたり、お電話したり、郵送物は包み方や切手の貼り方に至るまで気を付けていました。また、パーティでお料理がたりなくならないようにいつも気にかけていました。しかし、そうなるまでには、私が至らないため、後援者からのお叱りもあり、女将として後援者の方が育ててくださった面も大きいです。

私の思い以上に、後援者というものは、部屋の経済や力士の成長について考えてくれていました。ですから、やはり、人気商売とい

うことになると思います。親方のことがすごく好きな人の集まりということです。ですので、親方の師匠としての思いを部屋の運営の中で具体化していくこと、そこからズレないということが一番大切なことかもしれません。

と、述べている。

これまでの実績を、決して自分の功績と思わず、周囲の人達、とりわけ後援者（応援団）によって育ててもらっている、と謙虚である。特に全幅の信頼を寄せる夫との二人三脚が、おかみ稼業には不可欠な作業であることが窺われる。

これは、カラオケ喫茶ママの仕事について、共通する部分が多い。

インタビューでも「応援するお客さんがいたから続けてこられた」という回答は5人のママすべてであった。「夫との二人三脚で難局に立ち向かえた」と感謝を口にするママが多かった。

4.3 母性と母親

インタビューで、「お客さんはママをどういう眼（母親か、友達か、）でみていたか」を問うと、全員「よく分からない。」と答えた。ただ、「恋人か」と問うと「若い時にはそういう男性客もいたわね。」と、遠くを見つめるような眼で自信に満ちた回答をするママもいた。

インタビューをした全員のママのほほ笑みには惹きつけられる。

教育学者の森信三（1896-1992）は「とりわけ、女性からほほ笑みが消え去ったら、あとに一体何が残るといえるのだろうか。ほほ笑みのない女性は、歌を忘れたカナリヤ以上に味気ないものだとすることを、改めて深く省みるべきだ。」⁽⁵⁾と述べている。

かつて、カラオケ喫茶を訪問した時、お客さんから「ママは母性に溢れたおふくろのようだ、そのほほ笑みは亡くなった母を思い出

させる。」と語るのは、男性客のみならず、女性客もいた。カラオケ喫茶に通うお客さんの年齢層は60代～80代が中心であり、その多くの母親はすでに亡くなっている人がほとんどである。

経済学・心理学者の林道義（1937-）は「母性とは、子どもを産み育てる過程で働く、受容的な優しい心の働きである。この心の働きは、子どもを養い、育て、世話し、保護するという保育行動として現われ、子どもを可愛いと感ずる「慈しむ感情」を伴う。」⁽⁶⁾としている。

また、森信三は「女性の特質は、素直さと優しさにあるといえる。優しさは我が子を育むその天性の使命からきている。女性の真の幸せは、子どもを生んで母親となり、母親としての真の自覚に生きることにある。それ故、女性の女性たる所以は、母親になることによって、初めてその成熟に達する。女性は「家庭における太陽」である。女性は「家庭」という王国にあっては、まさに太陽のように、全家族員の心を温め、その生命を育み育てること、あたかも太陽のようだというわけである。」⁽⁷⁾としている。

しかし、今、母親がおかしい。最近の相次ぐ虐待報道でも明らかなように、母が母でなくなってきた。子どもを優しい気持ちで可愛がり、子どもの状態に気を配り、無条件で守るといふ母の姿、母の役割が、どんどん少なくなってきた。

まさに、家庭の危機といえる状態である。カラオケ喫茶のママは、カラオケ喫茶の将来について「将来はないわね」と存続の危機を口にする。それは、自らが高齢化し、ママとしての役割を果たせなくなり、近い将来、お店を続けていくことができないことを意味し、家庭の危機も、カラオケ喫茶の危機も根底は同じところにあるのではないだろうか。

カラオケ喫茶に通う多くの人は同じような思いを抱いていると思われる。

4.4 菩薩のようなママ

カラオケ喫茶のママは菩薩の人でもある。

菩薩とは、「さとりを求める人」の意である。生命論からいえば自己の徳性を発揮して他に尽くそうとする生命状態をいう。菩薩は、修業の結果、悟りの境地に到達し、極楽の仏国土に安住できるのだが、苦しみ迷う衆生のためにあえてこの世に留まって、仏教を広めようとしている存在とされる。菩薩という言葉は観音菩薩・弥勒菩薩などのほか、大乘仏教徒とのことでもあり、奈良時代には行基など、私度僧を含めて民間で崇められた僧を菩薩といった⁽⁸⁾。

菩薩の道をゆく者は利他（他者のために）を志し、①布施＝惜しまず与えること、②持戒＝戒を保持すること、③忍辱＝耐え忍ぶこと、④精進＝努力すること、⑤禪定＝精神を統一すること、⑥智慧＝物事を正しく見て明らかにすること、の六項目の成就を願う⁽⁹⁾。

菩薩は自分の安寧を求めることはせず、俗世間のわずらわしい生活に身を投じて、無知と愚かな執着のせいで三界を永遠に輪廻し続け、人間としての究極のゴールに向かって何の努力もしていない大衆を救うため、全力を尽くすのである。出家せる比丘でも在家の国王官吏商人等誰でも、衆生済度の誓願を立てて利他行に邁進する人は菩薩である。菩薩は世間において活躍する。泥沼に咲く蓮華がけがれに染まることなく、清らかであるのが菩薩の姿であるといわれる。⁽¹⁰⁾

そして、悩み多い生活をしている人々を教え導いて、そういう悲しい生活を脱出せしめたいという気持ちを「慈悲」の心という。この慈悲の心持ちから世の中をもっと善くしようという決心が生じ、そうして世の中を善くするには、自分に世の中の人を助け救うだけの力がなければ、助けたり救ったりすることはできないのであるから、自分の修業をもっと励んでゆきたいと思う。この考えにたつものが菩薩である。

ジェンダーやIGBTについて、初めて聞く言葉と答えたママもいたが、ママ達の寛容な対応がすべての多様性を引き受ける菩薩の姿である。さらに、ママ全員が「年寄が大好き、手をさしのべたい」と答えている。

4.5 幸福なママ

今回インタビューしたママは全員、「凄く幸せ」と回答している。

幸福について、武者小路実篤（1985-1976）は「人間は幸福になるには努力と根気と精神力がいり、注意が必要であり、人々と協力することが必要である。」⁽¹¹⁾とし、アラン（1868-1951）は「幸福はつくり出すもので、幸福になろうとしなければ幸福になれない。」⁽¹²⁾としている。

また、バートランド・ラッセル（1872-1970）は『幸福論』で、人を幸福にするのは外界への興味であり、「熱意」、「愛情」、「家族」、「仕事」、「私心のない興味」が不幸を阻止してくれるとしている。そして幸福に不可欠なものとして、「食と住」、「健康」、「愛情」、「仕事上の成功」、「仲間から尊敬されること」をあげている。⁽¹³⁾

多くの著書で、個人における幸福とは、まず「健康」、「仕事」、「愛情（家族）」と記されている。これが、幸福の核心といえるものである。

健康であり、仕事や活動が充実し、家族内が満たされていないと、ママとして目をお客さんに向けることはできないであろう。幸福に至る道は、全くのバラバラで何でもよいというものではない。生活に余裕があり、社会的交流に恵まれ、人生の意義や信念に支えられるという、一定の方向に向き、個人の人生にいくらかの安定があることが人の幸福にとっての必要条件と思われる。

そして、森信三は「幸福獲得の三大秘訣」として、①自分のなすべき勤め（責任）に対して、常に全力を挙げてそれと取り組むこと、

②常に、積極的に、物事を工夫してそれを見事に仕上げること。③人に対して親切にし、人のために尽くす。

この三ヶ条を守ることによって、幸福や生き甲斐を手に入れることができる⁽¹⁴⁾と述べているが、インタビューした5人のママは幸福の必要条件、幸福獲得の三大秘訣を獲得している。

また、人間は一人では生きていけない。生きていくことのできない存在である。他との繋がり、他のお陰で生きることができる。それは、他の物や他の生き物との関係でもそうだし、特に他の人間との繋がりによって生きている。人間は「関係的存在」であり、仏教でいえば「縁起」的存在なのである。繋がりを『広辞苑』では、①つながること。また、そのもの。②きずな。③連携。関係。と、ある。情報社会となり、インターネットの普及により、「人間は一人では生きられない」から「一人でも生きていける社会」となった。だから、よけい人との繋がりが難しい。

歌人俵万智(1962-)著『サラダ記念日』には、「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のあたたかさ」という一首がある。ママとお客さんの関係について、わかりきった事をママに話しかけてママが何気なく答える。これが繋がりの基本であり、繋がりは幸福の必要十分条件である。幸福と繋がりは、人と対面で触れ合い、関わることによって醸成される。SNSではこうはいかない。5人のママさんはSNSはLINE以外はしないそうだ。カラオケ喫茶は幸福研究のヒントがちりばめられている。

5 これからのカラオケ喫茶

5人のママは、「歌謡曲・演歌は大好き、歌謡曲・演歌は下火とはいえ、絶対に無くならない。」と異口同音に語るが、ママは全員「カラオケ喫茶の未来は暗い。」「もう死んでる。」

と言っていた。

将来を考えた場合、若い世代(40代～50代)を取り組むことが喫緊の課題である。演歌歌手清水たま希さんは「若い人(30～40代)の昭和歌謡カセットブームの再来で演歌・歌謡曲にはまだまだ、未来がある。人と人との絆が分断され、お年寄りが元気がない。歌を聞けば誰でも元気になる。歌は人の心に響く。演歌・歌謡曲は決して無くならない」と語る。現在のカラオケ喫茶世代の子どもたち位の年齢の人たちを取り込む。その中心としての役割を果たすのがカラオケ喫茶である。

また、カラオケ喫茶は音響・防音設備に優れ、小ライブ会場として適切である。

その上、普通のライブ会場よりは低料金で使用できる。曲のジャンルは異なるので、受け入れるには、相当抵抗があると思われるが、カラオケ文化を維持していくには多様な音楽の受入れも必要な意識改革の時期にきている。仕事や学業をもつ若い人に利用してもらうため営業時間外での使用を検討すべきである。

そして、カラオケ発表会の時、昭和歌謡のバック演奏に若いミュージシャンにお願いすることにより、演歌・歌謡曲が引き継がれていくのではないだろうか。

6 まとめ

人間はもどるところ(回帰・原点)は女性であり母親である。

母性・母を求めて、喜びの時も悲しみの時も、そこへ戻り、浸りたいという本能があるのではないだろうか。それが人間の心理であり、普遍的な思いと考えられる。

民俗学者宮本常一(1907-1981)は母の葬儀について、「お葬式の日には小雨がふっていましたが、村中の人がおくってくれました。もっともっと長生きをしていただきたいと思いましたが、ふりかえって見れば、生涯を働

きつづけて、苦をたいして苦にもせず、不平もいわず、人をうらまず、またうらまれることもなく、ひたすらに自らの持つ愛情を周囲の人びとにそそいで、世の中よかれとあるいて来た母の最期としてふさわしいものであったかと思います」⁽¹⁵⁾と述懐している。

カラオケ喫茶のお客さんは年齢的にも男性客は、母親を亡くし、妻を亡くした、女性客は母を亡くした、という人が多い。

ママは人生経験が豊富であり、全てを受け入れてくれ、拠り所となる存在である。そこで歌を歌うという行為は赤ちゃんと同じであり、泣く行為と歌う行為は本質的に同一のものといえる。カラオケ喫茶はお客さんにとって、母のもとへ帰る行為と同じである。

さだまさし作詞「秋桜」は山口百恵が歌い大ヒットしたが、その歌詞の最後の五行

ありがたい言葉をかみしめながら / 生きて
みます私なりに / こんな小春日和の穏やかな
日は / もう少しあなたの子供で / いさせてく
ださい

と、ある。

インタビューしたママ全員が、異口同音にカラオケ喫茶を経営している（いた）ことは「凄く幸せ」と語っていた。まさに、カラオケ喫茶のママで生きることは、幸せは此処にある。

2021年10月18日から各自粛は解除された。感染対策を万全にし、カラオケを歌えるようになり、お客さんが戻りつつある。

図1 「五季」ママ

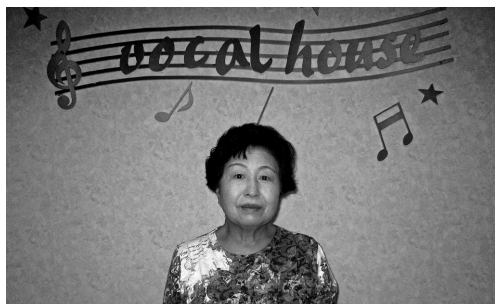


写真1 ママ：奥原ハルさん

Q 自分の性格

やさしい、一歩下がる、お客さんの相談をよく受ける。

Q ママでよかったか

ママには向いているとは思わないが、お店をやってよかった。

Q 趣味は

友達・同級生に会うこと、移動手段をもたない人の送迎。

Q お客の年齢層

60代～80代（男女比：半々）

Q お店の特徴、ウリ

来店者が静かに歌を聞く、マナーが徹底している。

Q お店を始めてよかったこと

多くの人に来てもらい、知り合いが沢山できたこと。

Q 一番楽しかったこと

マイクロバスを借りて、お客さんと行った日帰りバス旅行（栗拾い）。

Q 一番充感を感じたこと

お客さんが上手になっていく喜び。

Q お客さんに接するときの心構え、気を付けていること

男性客：社長とは言わない、労働者も社長も同じ立場で

女性客：身に着ける服装は、お客さんより高価なもの、華美なものは避ける。

Q 「イヤ」な客は

自分よがりの人、変えるといいなと思う。

Q ママから見てお客さんが店に通う理由

お店の雰囲気、音響がいい、名古屋市で三指に入る。

Q カラオケ喫茶の将来

小さなお店と固定客がいればカラオケ喫茶はなくなる。金儲けではなく、お客さんをもっと大事にしていくことが大切。

Q 今は幸せか

子供にも恵まれ、多くの人に助けられてきた。とても幸せ。

Q これからどんな事をしていきたいか

体の不自由なお客さんのお手伝いをしていきたい。

図2 「うさぎのいえ」ママ



写真2 ママ：岡田尚子さん

Q 自分の性格

明るく、人のためトコトン尽くす。相談されたらトコトン面倒を見る。

Q ママでよかったか

よかった。好きな歌が皆と歌えカラオケ喫茶を経営してよかった。経営理念は「損して得とれ」。あまり利益にならないけれど、人に喜んでもらえる。「ありがとう」の言葉がもらえるのは、ママの喜び。

Q 趣味

人と会うこと。

Q お客の年齢層

67歳～93歳、年金生活者中心（男女比：半々）

Q お店の特徴、ウリ

金儲け主義ではない、年金生活者の負担にならないよう配慮、音響が自慢。

Q お店を始めてよかったこと

いろいろな人と出会えた。

Q 苦労したこと、困ったこと、悔いが残ること

お店のイベントで飲み放題のサービスをしていた時、お客さん同士で喧嘩したこと。お店が繁盛していることをやっかみ、嫌がらせの張り紙をされたこと。親しいお客さんが亡くなった時、お店が忙しく会いにいけなかったこと。

Q お客さんに接するときの心構え、気を付けていること

男性客・女性客に対して、誰に対してもいつも同じ対応。男女の区別はなし。

Q 「イヤ」な客は

人の悪口を言う人。

Q ママから見てお客さんが店に通う理由

「ママがいるからお店に来る」が大半。だから、お店のスタッフは雇わない。

Q カラオケ喫茶の将来

先細りだと思う。この先どうなるのか。ライブ型式など変わったやり方をしないと。若い人を呼び込むのは難しい。

Q 今は幸せか

好きな事ができ、多くの人に囲まれ幸せ。主人に感謝です。

Q これからどんな事をしていきたいか

これから先、細々と経営を続け、皆と楽しんでいきたい。

図3 「なお」ママ



写真3 ママ：筒井澄子さん

Q 自分の性格

よく気が付き、気配りできる。やさしい気性。

Q ママでよかったか

人に使われるのがイヤ。人に使われるのができない。若い時からママしか頭になかった。

Q 趣味は

ゴルフ、麻雀。

Q お客の年齢層

50代～90代（男女比：女性が多い）

Q お店の特徴、ウリ

ママがウリ。お客さんに徹底して尽くす。

Q お店を始めてよかったこと

夜はカラオケ居酒屋になるので、飲むことが大好き。

Q 苦労したこと、困ったこと、失敗したこと

苦労とは思わない。一生懸命やってきた。男気性なので困ったこともなし。自分なりに一生懸命やってきたので、失敗とは思わない。私はいつもケンカ腰。

Q 一番充実を感じたこと

イベントなどで、大勢のお客さんを集めたこと。

Q お客さんに接するときの心構え、気を付けていること

男性客：昼と夜とは違う

女性客：高齢の人には要注意、お店で話したことが、いろんな人にすぐ伝わる。

Q 「イヤ」な客は

イヤミな客。あるスタッフを気に入りに、ママを排除しようとする客。

Q ママから見てお客さんが店に通う理由

ママがいるから。

Q カラオケ喫茶の将来

年寄りが減る。若い人が店に来ない。カラオケ喫茶の将来は暗い。

Q 今は幸せか

子供に恵まれ幸せ。

Q こんな事をしてあげばよかったというのは

精一杯生きてきたので何もなし。

図4 「あかり」ママ



写真4 ママ：清水久子さん 左は歌手の清水たま希さん

- Q 自分の性格は
パッパッと生きている、好き嫌いが激しい。キツイ、はっきり物を言うタイプ。
- Q ママでよかったか
人に使われるのが嫌い。だからママで良かった。
- Q 趣味は
お客さんと一緒に行くゴルフ、ボーリング。年を取って、最近はあまり行っていない。
- Q お客の年齢層
60代～90代（男女比：半々）
- Q お店の特徴、ウリ
歌手清水たま希にいつでも会える。ママがいい。
- Q お店を始めてよかったこと
多くの人と出会え、お客さんに恵まれた。
- Q 苦労していること
お客さんの歌の順番（カラオケチケットを出した順番でないと、たまにクレーム）。
- Q 悔いが残ること
もっとお客さんが集まる場所にお店を構えればよかった。
- Q 一番充実を感じることに
今でも「あかり」があり、お店を続けることができたこと。
- Q お客さんに接するときの心構え、気を付けていること
中高年の出遣い、恋愛が多かった。10組近く再婚されたが、恋愛相談が多かった。
- Q 「イヤ」な客は
ケチ、しつこい客。
- Q ママから見てお客さんが店に通う理由
ハッキリ物を言うママがいるから。清水たま希に会えるから。
- Q カラオケ喫茶の将来
もう終わりだね。良くなるなら、私に教えて欲しい。
- Q 今は幸せか
幸せ。お店を持って、続けてこれた。
- Q こんな事をしておけばよかったというのは
何もなし。私にはカラオケ喫茶しかなかった。死ぬまで店を守り抜く。

図5 「わらら」ママ



写真5 ママ：佐伯礼子さん



写真6 お客様に囲まれて

Q 自分の性格は

いい加減、気前がいい。明るい、プラス思考。

Q ママでよかったか

ママで良かった。もう少し早くこういう店をやりたいかった。人生をもう一度やり直したい。

Q 趣味は 絵画、洋裁・和裁。

Q お客の年齢層 75歳～80代中心（男女比：圧倒的に女性）お店での恋愛も多い。

Q お店の特徴、ウリ

ママの存在、お客さんを物で釣るわけでないけれど、イベント、くじのサービス。皆さんに元気を与えたい。癒しの店、店に行くと何かいいことがある、心が豊かになる。

Q お店を始めてよかったこと

多くの人と出会え、家族と一緒に。家族が近くにいるといつでも会える、その感覚を共有。

Q 苦労していること

常連さんをつかむまでが大変。私は毎日お店に来る客を常連だと思っている。

Q 失敗したこと

そそっかしいので、階段から落ちて怪我をしたり、料理で調味料を間違えたこと。

Q 一番充実を感じること

常連さんが毎日お店に来てくれること。

Q 一番困ること

非常事態宣言が終わっても県の指導でカラオケで歌えないこと。

Q お客さんに接するときの心構え、気を付けていること

私には色気がない、男性客も女性客も一緒にの対応。言葉使いには気を付けている。

Q 「イヤ」な客は

酔っ払い。酒に酔う客は即出入り禁止。

Q ママから見てお客さんが店に通う理由

ママに会える。励ましてもらえる。

Q カラオケ喫茶の将来

40代～50代で演歌・歌謡曲を歌う人がいないのでカラオケ喫茶は衰退していく。カラオケ業界を引っ張っていくリーダーがいらない。微力ながら盛り上げていきたい。

Q 今は幸せか

お客さんに恵まれ、幸せ。亡くなった主人のお陰。

付記

本稿作成にあたり、カラオケ喫茶関係者皆様の取材協力ならびに掲載を承諾して頂き、御礼申し上げます。

注記

- (1) テイチクレコード所属、東海地区の第一人者、25歳でデビュー、現在までCD 8枚をリリース。最新曲は「夕月の花」(DAM 配信番号 2417-40)「存在感のある歌手であり続けたい」がモットー。東海ラジオのパーソナリティ。刑務所慰問のボランティア活動にも積極的、歌唱力とファンを大切に作る姿勢は、多くの演歌ファンを惹きつける。
- (2) 吉村英夫『男はつらいよ魅力大全』講談社 1992 p174-175
松竹株式会社事業推進部『男はつらいよ お帰り寅さん』久栄社 2019
- (3) 甲府市出身。昭和天皇が最も好んだといわれる力士。1986年5月場所後に部屋を創設。以降、学生出身者と外国人は入門させない、入門から一定期間過ぎても芽の出ない力士は引退させて第二の人生を歩ませる、中学卒の力士には、山梨県の日本航空高等学校の通信課程を履修させて高校卒業の資格を取得できるようにするなど独自の方針を掲げての部屋運営を行い、4人の関取(十両)を輩出し、2013年部屋を閉鎖。
- (4) 弥富市出身、金城学院大学英文科卒業。1975年、当時の高砂部屋人気力士「富士桜」と結婚。1986年、中村部屋創設とともに女将さんとなる。1999年、東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科(教育学専攻)に入学。2003年、「今日の力士養成のあり方」をテーマに研究して論文を発表、修士号を得る。2004年には、『相撲部屋 24時おかみさん奮戦記』(講談社+a新書)を出版
- (5) 『女人開眼抄』致知出版社 2012p99
- (6) 『母性の復権』中公新書 1999 p1
- (7) 前掲 5 p49
- (8) 角修『法華経の辞典』春秋社 2011 p93

- (9) 立正大学日蓮教学研究所編『日蓮宗読本』法蔵館 1987 p24。
- (10) 邊寶陽『法華経の事典』東京堂出版 2013 p383
- (11) 『私の人生論』日本ブックエース 2010 p272
- (12) 『幸福論』岩波文庫 1998 p303
- (13) 『ラッセル幸福論』岩波文庫 1991
- (14) 前掲 5 p10
- (15) 宮本常一『女の民俗誌』岩波現代文庫 2001 p313

参考文献

- ・ アリストテレス 高田三郎訳『ニコマコス倫理学 上・下』岩波文庫 1971
- ・ 幸田露伴『努力論』岩波文庫 1940
- ・ 佐伯啓思『反・不幸論』新潮新書 2012
- ・ デール・カーネギー 山口洋訳『人を動かす』創元社 1999
- ・ デレック・ボック 土屋直樹訳『幸福の研究』東洋経済新聞社 2011
- ・ 三木清『人生論ノート』新潮文庫 1954

